

昭和二十年一月、満州延吉予備士官学校に入校

同年六月、同校卒業。兵科見習士官となつて興安嶺五叉溝の師団司令部に赴任
同年八月、終戦。武装解除。シベリアに強制抑留

その他
長男に任職を譲つてからは、寺の多忙時は長男を手伝つて僧職を勤め、村の老人クラブの会長として会のお世話に余生の生きがいを感じて、その半生を処している。

(北海道 渡邊 建一)

遙か青春 シベリア

岩手県 鈴木良男

はじめに

昭和二十(一九四五)年八月九日未明、ソ連軍

は全ソ満国境の監視哨に対し一斉に砲撃を開始した。強力な空軍に援護されたソ連機動部隊は、何の抵抗も受けることなく国境を突破したのである。

すでに雪解けの頃から、ソ満国境には暗雲が立ち込めていた。独ソ戦終結と前後して、ソ連軍は極東への大移動をしつつあることは確認されていたが、かつて不滅を誇つた関東軍はもはや見る影もなく、第九十連隊からも三個中隊が本土決戦に備えて、この年の二月二十日、対馬の濟州島に完全武装で転出するなど、国境守備部隊は、教育係要員、特技兵を除きほとんどが転属となつて、監視哨勤務や衛兵要員にさえ事欠く現状であった。

八月九日午前八時三十分、前日、朝鮮から入隊したばかりの初年兵千五百人を連隊本部前に集めて、兵器・被服を支給していた最中であつた。突然、背後の山頂から三機のソ連機が急襲、アルシャン駅の軍施設に爆弾を投下し、機銃攻撃を繰り返して西方へ去つた。

この急襲には、誰もが狼狽の色を隠せなかつた。何せ、兵員、武器、機動力のすべてが質量ともに低下していて、歩兵でありながら分隊で数人の者が小銃を与えられず、樺の木で戦うという想像を絶する事態だったからである。それでも、本体主力は戦闘体制の陣地についていたのであつたが、翌十日昼頃、関東軍司令部から「工作物を破壊しながら、速やかに新京（長春）へ後退し、第三十軍司令官の指揮下に入るべし」との命令を受け、広範囲に散在する各部隊の結集にかなりの時間を浪費して、行軍序列を組んで新京までの七百キロメートルの道については十一日の夕刻だった。

このとき我々九十連隊は、アルシャンにあつて後衛の任にあり、第一大隊はアルシャンに進入したソ連軍と激戦、さらに十二日には第二大隊が戦車部隊との激突で、大隊長以下全員が玉砕。第三大隊はまた、列車移動による師団の退路の確保に当たっていたが、西部国境より進入していたソ連

戦車の砲撃で列車もろとも全滅した。

十三日明け方、師団の先鋒隊が西口付近に到達したとき、すでに潜入していた敵の最強部隊が新京を目指す我が師団の退路に立ちはだかり、大激戦となる。そして翌十四日、後衛の九十連隊が、敵の追撃を応戦阻止しながら師団の位置にたどり着き、十五日までの二日間、退路を開くべく決死隊戦法を繰り返したが、利あらず、迫撃部隊も加わって南北と西の包囲攻撃を受けることになり、もはや玉砕あるのみとなったとき、師団長は興安嶺山中への退避を命じ、ハマコーザより迂回する決意で戦線を離脱することができたのである。その時あたかも八月十五日の終戦の日であつたのだが、暗号書の焼却部分、通信の不能により完全に孤立していたのであつた。

しかも戦線の離脱は、後退時の敵の分断や連絡の不足、乱戦中での撤退事情の違いや夜間による山岳地行動という悪条件の中で、完全に連携を失い、まさに敗戦兵そのものの集団になつたので

ある。

十六日の夕刻からは雨がやむことなく降り続いた。まる二日がかりでハマコーザに集結することはできたが、兵員は半減していた。それでも何とか部隊編成の立て直しがなされ、東南を目指して、降りしきる雨中の強行軍が昼夜兼行で続けられた。人馬は食なく道なく、落後者の続出であった。夏服の着用だったので、大陸の夜の寒さは耐えがたく、苦痛のうめき、重傷者は自決、実に死の行軍である。五分間の休憩に寝ついて起きない者、もう息を引き取って死んでいる者等々、草の根をかじりながらの一週間であった。二十三日の夕刻、どうにか山間部を抜けてコテネロという部落にたどり着いたのである。

降り続く雨の中、兵たちはニワトリ小屋を当てがわれて初めての宿営をとり、住民の心尽くしで空腹を慰め、戦野の夢に就いて、翌朝さらに新京へ向け行軍を続ける。

今度は師団の前衛を勤める我々九十連隊は、八

月二十五日、敵部隊を発見、直ちに右前方の高地に陣地体制を整え、連隊本部西山小隊は左翼第一線に配置された。私はその第二分隊長だった。午後一時半頃、敵は迫撃砲の援護のもと前進、三方に分かれて撃ちまくってくる。その数は百五十。対する我が分隊は、小銃五丁、軽機関銃一丁のみで、残りの兵は白樺の木槍であった。その上、弾も不足なのである。

こんな場合に有効とされる作戦に、敵を引きつけての手榴弾攻撃があった。敵はもう目前である。小隊長は、このままでは犬死にと見てとつて、後方の山の稜線まで後退を指示し夕刻を待った。

夕暮れの迫る頃、我々のもとに一個中隊と重機関銃が配備され、連隊大藤(だいたう)副官みずからが陣頭指揮に立って、砲兵隊の援護のもと白兵戦を指令。万雷の砲煙弾雨、山転地割とも称すべき砲撃戦の後、各隊一斉に突撃、敵陣へ突っ込む。敵はあわてて後退しながら自動小銃を乱射す

るが、このときの手榴弾攻撃は効果てきめんであった。

しかし、敵は容易に後退しなかった。当方もまた押し切れず釘づけ状態となったが、右の翼の中間隊が第二の喊声を上げて包囲攻撃をかけ、彼我入り乱れての大激戦の末、ついに敵を撃退させることができた。この戦果が、後に我々を反逆者とした理由と思われるものであったが、我が西山小隊長は壮烈な戦死を遂げ、戦友の大崎伍長は重傷など、百人を超える犠牲者を出した逃避行だったのである。

遅い月の出の明かりで戦死者を埋葬し、負傷者を救護車に収容して夜明けとともに前進、捕虜三人、軍旗の奪取など戦線の掃討を行なった後、予定の行動順路をとってイントール（音徳爾）へ進出した。

八月二十八日、イントールに到着し、消息を絶っていた隊の集結も確認されつつあったとき、開戦以来初めて姿を見せた日の丸翼の飛行機がビ

ラをまいて付近の草原に着陸した。降り立ったのは日ソ両軍参謀の軍使であり、これが終戦の告示であった。八月二十九日、最後まで戦った関東軍第七師団は涙の武装解除をし、全員捕虜となったのである。

因われ身の移動

昭和二十年八月二十九日、満州国イントールで武装解除となった我々第七師団の将兵集団は、二十数人のソ連騎馬兵（馬も馬具も日本軍のもの）に誘導され、果て知れぬ道なき原野を西方に向かつて力なく重い足を運んだ。

当初、ソ連兵は緊張きみで、時折、上空に向けて発砲し、みずからの心細さをまぎらわしている風だったが、いづれ我々は丸腰であり、彼らには自動小銃がある。勝者であれば、やがて強がりからの本性を現わし始めた。

彼らは、目ぼしい物は何でも欲しがった。たまま声のかかる休憩時には、我々一人ひとりの服

装を執拗に探る。最初のうちは恐る恐る猫が獲物にちよつかいの手を出すような素振りであったが、だんだんと大胆になって牙をむき出し、横暴極まる略奪行動が開始された。物珍しげな表情で手当たり次第、貴重品、特に皮革製品に目をつける。

時計、万年筆、石けん、雑囊、下士官、将校の凶囊に至るまで強奪し、中身の欲しいものだけを取って残余は捨てる。何一つとして返ってくる物はなく、また、取り戻すことは全く不可能である。歩行中であつても、彼らは馬上から略帽を奪い取って、帽子の内裏を確かめて捨てるのである。多くの戦友は、時計を強奪から守るため、略帽の汗よけ皮の裏布の中へ隠したのであるが、これを敵に見抜かれたのであつた。

私はいち早く、時計は軍靴の砂除け革の間に隠した。その後、軍衣の詰め襟をほどいて縫い込み、義兄の形見をこの略奪から免れることができた。

余りにも無法極まる行為に耐えかね少しでも抵

抗の態度を見せると、直ちに威嚇発砲をする。弱肉強食社会の勝者と敗者の関係は厳しく、ソ連軍の上官であつても、見て見ぬふりをするありさまであつた。防衛手段は、その都度スクラムを組んで団結を見せ、相手を睨むだけの抵抗のほかない。全く地獄の果ての始まりであつた。敗者の憂き目、うつぶんやる方なく、屈辱に耐えながら集団は移動する。

あの間断ない激戦の砲火をくぐり抜けた移動作戦中途での武装解除の結果なれば、何らの補給も得ることなく、我が集団の野宿は、初秋の迫り来る夜間の冷え込みの寒さに夏服で、疲労困憊の身を一層悩ませた。果てなき原野は、行けども行けども雑木一本とて見当たらない。枯れかけた草の茎を折って、燃料を貯えながら歩行する。

すでに飯盒、水筒までも略奪され、空缶、トクン板の切れ端一つが生活必需品として貴重であり、これらを背負う者、腰に提げる者、あたかも乞食の仮装行列そのものであつた。かつての皇軍

の華とうたわれた凜凜しき姿はもはや見る影もなく、生涯忘れることのできない恥辱と嘲笑の中を、引き回しに等しい移動であった。明日の運命も分からず、前途に大きな不安を募らせながら、引かれ行く羊の群の如く高原地帯をぞろぞろと歩き続け、興安郊外西方の河原に野宿する。

興安は広い道路が通り、大きな農場は一面トウモロコシ畑であった。飢えのどん底にあった八千人の集団が、一斉にこのトウモロコシに挑む。たちまち広大な農場も完全に荒らされた。ソ連側は略奪の常習犯であれば、あえて見て見ないふりで済む。私達は、この食料にありついたことで体力の回復に効果を上げることができた。

この農場深く入り込んだところに隠匿されていた略奪物資には、目を見張るものがあった。砂糖、水飴、大豆、小豆、各種缶詰その他、数々の野積み山の山。一体、いつ、誰が、どこから、この農場のど真ん中に運び込んだのだろう。侵攻のソ連軍の仕業か。我々は無言のうちに競って取り込

み、大戦果を上げたとばかり引き揚げんとするところを、ついてきた警戒兵に発見され、怒号の一喝で制止された。せつかく手にした獲物を、溜飲の思いで手離さざるを得ず、またもや氣力を失うのであった。

興安西方河原での野宿は一週間続き、ここで当方の戦傷病者がソ連軍によって野戦医療施設に収容された。

ソ連兵の略奪は更に新手が加わり、単独行動で捕まると丸裸にされる始末である。夜になると、酒気を帯びたソ連兵による集団での強盗、強奪、強要が続く。防衛策として、ガソリンの空缶を叩き鳴らして「泥棒、泥棒」と大勢が連呼して回ることを話し合った。騒然と唱和するとソ連兵は逃げ出し、被害を防止するに効果があった。

彼らは略奪した物品を、原住民との物物交換や、手なづけ用品として役立てる。腕時計を両腕に十数個もはめて、見せびらかしながら威張っている。当時の時計はねじ巻きである。止まると彼

らは故障と思ひ込み、壊れたと言う。

トウモロコシと少量のジャガイモを糧に食いつなぎ、やがて興安から北方への移動となった。着いたところは皮肉にも我が師団隷下、野砲連隊(第二三六部隊)の駐屯地、トボス(徳伯斯)である。敵の侵攻時の被害で、施設の大方が破壊されていた。屋根に穴のあいた厩舎にまですし詰めに分宿をする。それでも開戦以来一カ月余り、初めての夜露をしのご屋根の下で故郷の夢を見ることができた。空腹と迫り来る寒さを心配しながらここに二十日間を過ごした。

トボスの駅に有蓋貨車が二十両も到着した。全車両が二段に装置され、一見、人間輸送貨車である。我々を最後までだまし通した彼らの言葉「トウキョウ、ダモイ(東京に帰す)」は、移動のたびに必ず語る言葉であった。一説には、混雑に乗る逃亡者の防止のためと言われた。

貨車による移動を、あたかも特別待遇といった

態度で「ダワイ、ダワイ」を連発する中を乗車をする。列車は白城子(はくじょうし)へと南下。みずからも囚われの身となった列車は、同じ運命の乗客を乗せ、迷いと望みのはざまを喘ぐように、二日ばかりで白城子に着く。しかし、停車しても貨車の扉は嚴重に閉ざされて、白昼なのに暗く息苦しい。

ソ連兵によつてやつと扉が開かれると、そこは駅の構外である。警戒兵が厳しく、全く動くことができない。逃亡者を警戒してか、長居無用とばかり再び白城子を後にした。箱詰めの中であるが、またもや駅でもない所に半日も停車した。機関車だけがどこかへ仕事に行つてくる有様である。

輸送列車は、東方の新京へ向かっているようであったが、いつしかチチハルへと北上し、四五〇キロの線路を四日を要してチチハルの、もと日本軍野砲隊兵舎に収容された。

チチハル地域は、これまでに全く戦闘らしいも

のがなく、先着収容部隊の兵士たちは新品の軍服を着用し、二カ月近くの間、軍用糧秣を食べ放題の日を暮らし、丸々と太っていた。それに引きかえ、我々は乞食同然の姿に痩せ細り、見るからにいかにも敗残兵集団の醜態をさらけ出す。街頭で見入る原地民からは、せせら笑いや罵声が飛んでくる。昨日までとは全く逆の立場と言わんばかりの声を耳にする。

後で分かったことであるが、ソ連は、日本兵の連行を一時中断して、満州内のあらゆる物資・資材を根こそぎ自国へ輸送した。それ故に鉄道輸送は一層の混乱を来していたのである。毎日のように駅や軍の倉庫、工場へと使役にかり出された。ついこの間まで我が軍の物資だったものが、今はすべてソ連軍の手中におさまり、その上運搬の奉仕までとは、口には表せぬが誰もが感じた悲哀の日々であった。

深夜の糧秣の貨車積み。駅裏、距離にして三百メートル位にある野積みの糧秣を貨車まで運搬す

る作業で、ソ連兵は相変わらず「ダワイ、ダワイ」とせき立てる。我々は余計に牛歩戦術に出るが、距離的に、背に負う荷はかえって体にきく。

何か邪悪をもって仇を晴らしたい。飢餓の身に
ある我々が、我々の食料を奪取され、その上酷使に從わなければならぬ不満から、一粒でも彼らの手から減らしたい邪心が働く。故意に穀物袋の縫い目をほじくり穴をあけ、歩行しながら更に穴を大きくする。ソ連兵が袋の破れに気づき注意を促すが、我々には思い通りのことでおかまいなし。一人がやれば俺もやるで、このような場合の普及は素早い。まさに以心伝心、一斉に実行される有様である。ソ連兵には言葉が通じないから、「幾らでも軽くした方がいいぞ」と誰かが言う。この言葉に誘われたように、袋物を切る者、裂く者、穴をあける者……。

白米、小麦粉、砂糖、麦、大豆、小豆と、路面に標識の如くこぼれ落ちていて、翌日の話では、プラットホームは穀物の砂利を敷いたようであった

たとのことだった。このことは、後にシベリア生活の中で幾度となく、「あのときの米が」「あの麦が」などと及ばぬ語り草になったが後の祭り。空腹に泣くのである。

チチハルに収容されて間もないときであった。

夕食過ぎの舎内は雑談で賑わっていた。外から一発の銃声が聞こえ、誰かの騒ぎで外に出た。旧日本軍兵舎は敷地周囲に有刺鉄線の柵が張り巡らされ、要所に常夜灯の電柱が建ててある。この電灯の明かりの下に一人の兵士が倒れているのが見えた。食器洗い場が混み合うため、彼はこの明かりのもとで飯盒を洗う考えで近寄ったのを、警戒兵が逃亡するものと勘違いしての発砲で、既に絶命の状態であった。捕虜の運命の哀れさに、誰もが心胆を寒からしめた出来事であった。

同じ頃、収容所前の道路を、邦人の奥様と思われる三十代、和服姿の三人連れが西の方向へと歩いていた。我々としては、同胞の女性を見掛けることは実に久しぶり。しかし無気味な当節、大丈

夫なものだろうかと心配で眺めていた。そのとき、西方から二人組のソ連兵のジープが走ってきた。婦人方との擦れ違い時に停車、ジープへの乗車を強要している様子であった。乗れ、乗らぬの押し問答の末、遂に二人の婦人は乗車を強制されて発進する。そのとき、最後まで乗車を拒否し続けた婦人に向けて拳銃弾一発が発射され、婦人は倒れ込んだ。

我々の前方二、三百メートル程の路上における目撃の出来事である。犯行のジープは猛スピードで立ち去った。守ってあげたかったが我々は金網の中に囚われの身、怒鳴って地団太踏んで騒ぎ立て、歯ざしりして悔しがっても如何ともしがたく、なすすべを知らぬ運命の中、悲劇の極みに終わる。

ソ連軍やソ連兵で特に注目されたのは、軍の装備や糧秣・被服等でアメリカ製品の多いことであった。米ソの冷戦はすでに始まっていたはずだが、一方の大国ソ連の軍隊の中にこれだけの物量

が流れ込んでいる現実是我々の想像を越えるもので、あらためてアメリカの経済的大きさに驚異を覚えた。

満州の侵攻を果たしたソ連軍は、日夜、戦勝気分
の酒気に浸りながら、人道無視の傲慢を極め、
我々に対し怒号罵声を発しながら、物資の徴発、
奪取に懸命で、全くの火事場泥棒であった。

聞くところによれば、ソ連軍部は、邦人一般避
難集団の代表者に対し、婦人達の演芸団、慰問団
の派遣を強要し、結果は何らの身柄の保証もな
く、行き先不明となる始末で、婦人達は自衛手段
として短髪の男装に姿をやつし、逃れることに苦
慮されたとのこと。

騙されてシベリアへ

チチハルの駅で、有蓋貨車に二段棚を装置した
車両を時折見かけた。ほかに同僚達が貨車の中に
煉瓦でかまど造り作業を何車両かさされたこと
を不思議には思っていたが、貧すれば鈍すると

か、実はこれが問題のシベリアへの捕虜輸送長距
離列車と炊事設備車であったのに、「東京ダモイ」
の言葉を信用して気にとめなかった。

冬季の深まる十月末、乗車命令が出た。これに
先立って携帯被服が支給され、内容は、元日本軍
または満州国軍の防寒被服一式である。このとき
に至って戦友たち誰もが疑心を抱いた。夕刻に列
車は北に向かって発進、もはや万事休す、真つ
暗な車内の凍える寒さ、失望と落胆にさいなま
れ、口を開く者はいない。扉のすき間から、白銀
の大地が流れるように見える。北満の凍る鉄路を
車輪のきしむ音が一層哀愁の念をそそる。

武装解除のとき、阿部師団長は訓示の中で、
「我々は、ソ連軍司令官より本国帰還を命ぜられ
た。今後の行動においては冷静にソ連軍の指示に
従うこと」のお話があった。

誰かが「満州里だ、国境が近い」と言う。在満
出身者は地理に詳しい。満州の大地を二度と踏め
ることはないだろう。「幾多の戦没勇士安らかに、

さようなら」と、一同は黙禱を捧げる。

ちようどその途端、乱射の銃声が響く。列車からの脱走者が射撃されたのだ。誰もが無事の成功を祈るのみである。聞くところでは、シベリア鉄道にトンネルはなく、列車の前後部は監視兵のやぐら付きの車両である。革命時、白系露人、政治犯の囚人をシベリアの流刑地に送る専用車両で、今回のドイツ人、日本人捕虜の輸送にも使用されているとのことであった。

窮地に立つ境遇からは、どこからとなく噂が生まれる。常に流言飛語がまことしやかに広まるもので、憶測が噂を呼び、噂が憶測を呼ぶようなものである。

「輸送列車はシベリア鉄道チタ經由で、ウラジオから帰国させるそうだ」と、望みをつなぐ話が出る。給食などの停車中に、各車両から情報が伝わってくるのである。しかし、その真実の根拠はどこにもないのであるが、それでもまともに受け、まともとして伝えるのであるから、ますます

混乱した情況となる。

チチハルを出発してからまる九日である。相も変わらず昼夜の別なく、走ったと思えば止まり、また走ったと思えば、今度は駅でもない所に長時間放置される。暖房のない暗い貨車の中は冷蔵庫同様の寒さ。眠れぬ苦悶に、耐えがたい圧迫に、心身の疲労が募るばかり。輸送列車は西へ西へと進行する。

満州里を越えてシベリアに入った。貨車の中は一段と寒さが増し、重なり合う人、うづくまる人、眠れぬまま息をひそめている。排せつも貨車の中でするので、悪臭にも悩まされる。実に家畜輸送車さながらである。

夜九時頃、誰かが「チタに着いた」と言う。かわるがわる貨車の小さな高窓からのぞき込むと、列車は広い構内に停車していた。遠くに広がる市街地の夜景が寒々と見えた。間違いなくチタであるようだ。落ちついていている者は誰もいない。事は重大である。

ここがチタだとすれば、ここが東か西かの分岐点である、泣くも笑うも文句なしの分かれ目である。確かなことを知りたくて誰もが興奮するが、何の手掛かりも得ることなくしばらくの時間停車したが、扉が開くことなく発車である。

「それ、どっちに向かっている」と騒ぎ立てる。地形も知らず、初めて乗り入れた真夜中のシベリア鉄道。西も東も、左も右も知るよしがない。列車は何食わぬ顔でスピードを上げてばく進む。

誰もが気掛かりで眠られぬ夜を明かした。夜明けとともに列車の進行方向の反対側が明るくなっているのではないか。間もなく、みんなの顔が一変した。列車を追うように、後方から太陽が光線を差し込んできたのである。西から太陽が上るはずはない。西に向かって走っている証拠であった。

一瞬にして誰もが黙りこくった。晴天、小さな高窓からの光線で車内は薄明るくなり、皆の顔色が蒼白だった。友人の田中君が雑囊から磁石を取

り出し、マッチの明かりで方向探知に必死である。やっぱり西に向かっていると言う。すると誰かが、「シベリア鉄道だつて直線ばかりではないだろうよ。太陽も磁石も当てになるものか」と、半ばややくそに言う。棚の上の方から、「さつきから変わらず太陽が後ろだよ。モスクワに連れていって銃殺さ」「日露戦争の仇討ちされるさ」「いや、日露戦争のときは、日本ではロシア兵を優遇したそうさ。乃木大将と敵将の会見からも」「うん、今どき、国際法からも」「では、なぜ我々を連れていく。俺達はパンやジャガイモでは生きられんぞ」「戦争に負けて日本に帰れる顔もないけど」「俺達だけで負けた訳ではない。そんな話するな」と、次第次第に意見や会話が荒くなる。黙りこくっていた年配者が、「一人身の者はまだしも、俺には妻子がある……」「妻子のあるなしなんか変わりない。みんな一緒だ」。

現地の召集者は「やっぱり武装解除したときに、ずらかればよかった」「あれほどウラジオ経

由で帰国させると言ったのは真つ赤な嘘だったのか」と、車内の棚の上から下から、けんけんごうごうと絶望に溢れんばかりの会話が続いた。そして遂には、「もう天に任すより仕方がない。なるようになるさ」の言葉で車内は静まりかえり、お通夜の客を乗せたような列車は西へ西へと走り続けた。

昭和二十年十一月三日、明治節の日、夜中の十一時三十分。ガタゴトンとブレーキのきしむ音で列車が停止した。薄ら寝の目を覚ます。暫くして外の方から「下車準備」の声が聞こえた。間もなく扉が開かれ、下車が開始された。

丸太造りの栈橋上に降りる。引取りのソ連兵が焚き火をして待ち構えていた。例の略奪行動の素振りに出たが、当方の心得でこれを排除できた。あたり一面が貯木場で、うっすらと雪に覆われている。焚き火が何よりもありがたい。

間もなく「出発準備」の声がかかる。毛布に包み込んだ大きな荷物を、巻き脚絆（ゲートル）で

背負って、夜中、雪原の歩行開始である。

支給された防寒靴の大半は格納品のため、新品ではあるが、半張りゴムを接着していない未完成品であるから底革はツルツルで、雪の上の歩行は困難を極めた。ほとんど一歩ごとに滑り転ぶ。道なき湿地帯特有の草株が凍り、その上を薄雪が覆っている。まして夜道である。草株を踏むたび必ず滑って転ぶ。実に何百何千回転んだことであろうか。前に行く友が転び、立ち上がろうとしてまた転ぶ。その手助けをしようとする自分も転ぶ。滑る防寒靴には全く精根尽き果てる有様であつた。

峠一つを越えて、山の奥へ奥へと歩き続けた。もう昨夜から十二時間も歩く。

森林に囲まれた盆地に出た。緩やかな斜面の広場は、柵が回された牧場のように見えた。実はこの柵内に追い込まれるのは、家畜ならぬ我々の群れであつた。

柵は、上端を鋭く尖らし、高さ四メートルの丸

太を隙間なく並べ立て、四隅に監視櫓がある。更に丸太柵の内、外側に一・五メートル高さの有刺鉄線が張り巡らしてある。集団はこの中に倒れ込んだ。

極寒の原野に放られる

羊の群れを追い込むように入れられた柵内には何一つなく、誰もが啞然とした。困惑の限りであった。

暫くするとソ連兵が黒パンを運んできて、手まねで、分け合つて食べると言う。黒パンなるものに初めてお目にかかる。食べてみると、ポロポロした口ざわり、パンともダンゴとも言い難い代物で、それに、渋いような、酸っぱいような味と匂い。とても我々の口に合うものではなく、誰もが閉口したが、しかし、空腹も限度となれば、皆、いや応なしに胃袋へ押し込んだ。後には、この黒パン欲しさの飢餓に苦しむことになる。

疲れ切った身体を休めていると、今度は、数十

丁の斧と鋸が持ち込まれた。ソ連監督将校が何やら話している。満足な通訳もいなくてのこと、互いに困惑するばかり。手まね足まねのやり取りのあげく、「山から長木丸太を切つて来て、この柵内に我々が泊まる小屋を造れ」ということであった。「馬鹿野郎！ 野性の動物でもあるまいし、人間様がこんな所に寝起きができるか」と誰かが反発の言葉を吐き捨てるが、敗者には何の手だてもなく、ただ屈従するのみである。

冬の日暮れは早い。早速手分けして作業に取りかかる。長木丸太が運び込まれ、分隊ごとに六帖ほどの雪を除去して三角小屋を建てるのであるが、大地は岩盤のように凍結して何物も受け付けず、穴一つ掘ることができない。斧で地面に切り口を立て、杭先をひっかけて雪を固め、凍結させて固定する。これに横丸太数本を並べるが、これの結束に用いるものがなく、仕方なく毛布を裂いて結わいひもとする。骨組みができると、屋根と周りを軍用毛布で覆い、中には松葉を敷き詰め、

その上に毛布を敷く。中央に焚き火して急ごしらの宿舎は出来上がったものの、果して零下四〇度の酷寒に耐えられるであろうか。

暗闇の世界。小屋の中の焚き火を明かりに、外套、靴、帽子、手袋等、手持ちの防寒具、衣類のすべてを身につけて、焚き火当番の順番を決め、眠りについた。昨夜からの歩行で誰もが疲労し切っている。就寝の大事をとりたいた互いに体を寄せ合つて寝たのであるが、二時間くらいも眠つたであろうか、一人、また一人と目を覚ます。一人が体を動かすと次々と動き、遂に全員起きて焚き火を囲んで座り込む。誰の防寒帽も、顔の周りには薄く霜が見える。

静かな夜であるが、物凄く底冷えがする。「寒気身を刺す」とか、まさに痛さを感じる酷寒であった。焚き火を煽れば煙が小屋内に充満して涙のむせびに我慢しきれず、煙抜きに囲いの毛布を開くと、身を切る寒気がじかに肌を刺す。寒さと煙、疲労と空腹、それに募る不安が交錯して、不

眠と苦痛の第一夜であった。翌朝の顔は、皆一樣に煙で黒く、目は赤く充血して涙がしたたつていた。

こうしてシベリアの第一夜は、寒さと煙にさいなまれ眠られぬままの早朝六時、数発の自動小銃発射音が夜も明けやらぬ山間に響いた。何事が発生したかと一瞬緊張する。外では、「ダワイ、ダワイ」と例の怒声が聞こえる。起床の合図の発射音であった。

小屋から追い立てられて広場に集まる。戦友たちは皆、真つ赤に目を充血させ、眠れない夜を明かしてうつぶんやる方ない面持ちで、足踏みしながら朝の冷え込みに耐えていた。

ソ連兵は焚き火をして何か語り合っている。我々の方は点呼の心得で、六個中隊それぞれ四列縦隊に整列した。ソ連監督将校とその部下が、我々の作業隊長に何かを言っていたが、全く通じない。漸次分かってきたことは、六個中隊各四列の隊伍を解隊して、全隊を五列縦隊にまとめよう

というものだった。大変な長い列になる。すると今度は五列をあきらめて十列縦隊の編成だ。そして、右の列の人の肩をたたきながら、アジン、ドヴァー、トリー、と教え出した。我々の方はあきれ果て、悪たれて騒ぎ立てたり、故意に列を乱したりする。途中で数え間違えたりすると、また最初から始め、数回も繰り返して、千五百人の点呼に一時間半もかかった。

昨夜の苦痛が知恵を生み、翌晩からは、夕刻より小屋外の広場に大きな焚き火をして、おき火や消し炭をたくさん作り、小屋の中央に長くそれを配置し、全員が向き合って火に当たれるようにして数晩を過ごした。大陸における酷寒地の凍土は、解凍しても泥土化することはない。小屋内は、焚き火で暖をとったからといって、地表が少々乾く程度で、ぬかるようなことはなく、むしろ土ぼこり化するくらいである。

それにしても恐ろしいものである、人の体温で大地の凍土を解かすとは。一週間ほどでできたこ

の乾燥土をかき集めるとバケツ十杯ほどもある。この乾燥土を毛布の屋根にかぶせることにした。その頃になると、小屋内のおき火の溝も深くなってきたので、就寝前に、焚き火からのおき火と消し炭をたつぷり溝に入れ、その上に細い枝木を並べて毛布で覆うと、格好のオンドル式の床となった。これは、寒さを凌ぐための最初にして最大の工夫だった。室内の暖房が上がるにつれて小屋内の床土が掘り下げられ、屋根も盛り土も厚さを増して、半ば半地下式的小屋が形成されて、夜間の寒さからも煙の悩みからも解放され、原始的生活の中にあっても、日ごとの酷使からの疲労をどうにか安眠によって回復することができた。

その頃、我々の手で収容施設の建築が進められていたが、完成までの一カ月間、この穴小屋生活が続いたのだった。

シベリア小唄

貨物列車にのせられて

着いたところはシベリアの

ジップヘーゲン山の奥

これがおいらの旅の宿

シベリアの月は、我々にとって唯一の希望と慰めと追憶を写し出してくれる幻想の鏡であり、また、みずからを正す鑑でもあった。焦がれる父母、妻子、恋人、しのばれる故郷の山、川、海、村も町も走馬灯の如く思い浮かばせる。

流行歌の「月が鏡であつたなら」、唱歌の「兎追いしかの山」などを口ずさむ。

大きな満月。我が故郷でも同じ思いでこの月を眺めているだろうか。シベリアの月、故郷の月、無事を伝えてくれ。募る思いが涙に曇るとき、さびしさが忍び寄るように雲が流れて月がかすむ。ああ、早く帰れる日が……。母の手料理をいただきながら、あの我が家の縁側でこの月を眺め、シベリアの思い出を語る日を夢想しながら夜が更ける。

遠くから、シベリア鉄道の夜行列車の汽笛が聞こえてくる。

反乱軍にみなされた第七師団

最後まで戦った関東軍第七師団は、歩兵第九十連隊のほか、歩兵第七十七連隊、歩兵第七十八連隊の三個連隊で編成されていた。

ソ連側の呼称である第五一一労働大隊ジップヘーゲン収容所は、その主力の役割を果たした第九十連隊が大多数を占め、「流刑の獄舎」と称される。正にその名のとおり、他の収容所の戦友との交流等はもちろんのこと、外部との一切が隔絶された中での生活で、流れるデマと噂に騙される日々であり、せいぜい得られる情報といえ、後にハバロフスクの洗脳工作員が、ソ連政治部員の指導下で発行した「日本新聞」のデマ記事くらいであった。

帰国以来の戦友会や抑留体験者との出会いの場で、各々の口から出る体験の語り草は、悲哀の当

時がしのばれて興奮と涙の話題が、奇妙な懐かしさをもって止むところを知らず続くのであるが、ソ連全土に散在した千数百カ所に及ぶ収容所の数であった。その施設環境、食料事情、作業内容等々は千差万別で、多少の運、不運はあつたとしても、あの飢餓と屈辱、過酷な強制労働事情に変わりはない。ソ連は我々を拉致連行の当初から、抑留者の人命を顧みることなく、消耗品、虫けら同然の扱いで、飢餓、過労死、病死等、一定の死亡者を見込んでの強制手段であつたことは否定できない。多くの体験者の総合的聞き込み等から比較検討するに、厳寒の山野、全くの無施設の露天で原始生活を余儀なくされた同胞が受けた残酷な処遇は、他に比類なきものだったことが知れる。

終戦も知らずに幾多の戦闘を続行し、玉砕の憂き目に遭いながらもソ連軍に対して損害を与え、最後まで闘う羽目になつた我が第七師団がソ連側に反乱軍とみなされ、特に残虐非道を極める処遇を受ける結果になつたものである。

特に、師団隷下第九十連隊主力編成のジップヘーゲン収容所の被害は甚大で、昭和二十年中の二カ月の間に四十三人、二十一年には五百六十人が死亡し、さらに、病気による入院者は二十年百九十三人、二十一年は百十人の計三百三人であつたが、そのうち約二百数十人が入院直後あえなく死亡し、当初千五百人からいた抑留者は五百数十人に激減したのである。しかもこれは、僅か半年足らずの出来事で、いかに悲惨なものであつたかご想像いただけるものと思う。

ちなみに、第七師団の戦病死者は五千百七十九人であり、岩手県人は八百九十八人、内、気仙管内は八十七人、大船渡二十六人、陸前高田三十六人、三陸町十二人、住田町十七人となつてゐる。

大藤作業隊長を思う

当初の一カ月ほどは、第九十連隊長の早田正義少佐が作業隊長であつた。しかし、その後、数人

の将校が残留しただけで、早田隊長以下の将校は
将校大隊へと収容所替えになって、後任に、第九
十連隊の副官であった大藤審（だいとうしん）中
尉（後、大尉）が当たられたのだった。

大藤隊長は、私が昭和十八年、第九十連隊第九
中隊に所属当時、隣の兵舎が第一中隊で、その中
隊長であった。当時、大藤中隊長は、連隊切つて
の精神訓話の名士であるとの評判を、他中隊の私
たちも耳にするほど知略知謀に優れた方と聞い
た。

昭和二十年二月頃から、部隊は頻繁に将兵の転
出移動が行われ、私もこのとき連隊本部所属と
なった。その後も入隊・転出は続き、部隊編成に
大きな変貌が見られるに至り、二十年八月六日、
新任連隊長に早田正義少佐が着任して、連隊副官
に大藤中尉が任命され、三日後の八月九日から武
装解除の八月二十九日まで、歩兵九十連隊の作戦
指揮に連隊長を補佐して奮迅の活躍をされたの
だった。

シベリア抑留、強制労働のノルマ遂行を強要す
るソ連監督将校に対して、大藤隊長が強気の反論
を打ちかましている場面はたびたび見受けられ
た。隊長は常に「我々は耐え忍んで、生きて祖国
に帰ることが本分である」という日頃の励ましの
言葉で、「ソ連側のノルマを励行することはない」
「いかにしてノルマ百パーセントと相手に認めさ
せるかを工夫しよう」「相手に見抜かれぬように
して体力の温存を図るべし」と指導された。病弱
者続出時の作業休、入院などをソ連側に強要し、
作業人員指定数の削減や過酷なノルマ等でもたび
たび折衝に苦労されていた。

病死者の歯止めと体力の復活を重点とした生活
環境の改善整備を、自活作業だとのことで、ソ連
側にその要員を認めさせ、資材不足を克服しての
改善の成果は、隊員の精神的、体力的向上に多大
の効果をもたらした。

追って思想運動の盛り上がりを見るや、大
藤隊長は、「思想運動の自由は良いが、本末転倒

の誤らぬことが肝要である」「帰国する解放手段としての活動は意に反しない」と訓示されたが、この言が災いしてか、隊長はジップヘーゲン收容所に部下思いの業績を残し、移動命令により、別れを惜しまれながら、いずことも知れぬ地に立ち去られたのである。一説に、洗脳工作員の密告によるとの噂もあった。かくして後任の作業隊長には長尾少尉がつくことになる。

帰国後、戦友間の消息も途絶えがちな頃、ある集まりで大藤隊長が帰国後死亡されたことを知り、あれほど我々を励ましてくれた頑健な体軀の隊長がと、惜念の聲がしきりに聞かれた。ご冥福を祈る。

スンハラ收容所舎屋の建設

スンハラの山は、一時期ドイツの捕虜が作業に ついたが、日本兵が来ることになったのでドイツの捕虜は他所へ移動したということが分かった。敷地造成を手掛けた跡があり、その作業の続行か

ら開始された。

凍結した大地は岩盤同様で、人手の土工具などでは歯が立つものではなく、焚き火をして解凍を待つのだが、火の熱は地中には伝わりが少ない。勢い作業は進まないもので、ソ連兵は怒鳴り立ての連日である。

何はともあれ、全く言葉の通じない状態で仕事につくのだから大変である。また一方では、收容舎屋の建築に着工するとはいうものの、これまた素人の集まり。生まれながらにして労働に未経験の者、鋸、斧、槌など手にしたこともない連中にはどだい、無理難題以外の何ものでもない。それにしても、設計図とか施工図のような、概略なりともつかめる書き物とか、頼れる説明なり手ほどきなりがあつてのことならともかく、騒ぎ立てるソ連兵からして、技能者でもなければ指導者でもない。

何事につけソ連流の作業法は能率的でない。その上、厳寒の中で言葉が通じないとなれば、誰で

あれ考えはまとまらず、やる気になる者もなく、また、リーダーシップをとろうとする者もなく、ソ連兵の目を盗んでは焚き火に身を寄せて体力の温存を計るのである。人跡未踏の凍土、何一つとして凍らぬものとしてないシベリアの地でのこの作業は過酷を極めた。

図に示して納得すれば訳がない。まず、五メートルの掘つ立て丸太柱の地上部分に、幅七〜八センチ掛ける、深さ五〜六センチの溝を造り、これと直角方向に同様の作業をしたものが四本（これが建物の隅柱である）。さらに同様の溝を相対面に掘つたものを造る。この数は、建物の間口、奥行の大きさによつて異なる数となる。

柱の位置を四メートル間隔に、深さ六十〜七十センチくらい掘つて、これに柱を立てる。次に柱間隔側面に四メートル丸太を当て、柱間の長さを合わせたこの丸太の両端に、柱の溝と同じ寸法のホゾを付け、これを柱間にはめ込み、この方法で建物を一周する。二段目の丸太も同じ方法で造

り、さらに丸太の下端となる面を谷状に斧削りする。

最初に取り付けた丸太の上端に、湿地から採ってきた苔を並べて敷いて、その上に二段目、そして同様に次々と積み重ねる。苔は丸太の隙間をふさぐためのものであるが、これも完全凍結であるから解凍して使用するが、しかし、すぐ凍りつくのである。

五〜六段積木したときに入り口、窓の位置に、大きさに合わせた幅で丸太一本を切り取っておく。（後で必要な大きさに上下に切り込み、入り口や窓の穴をあける）

こうして建物の大きさによつて積木が重ねられ、最後の丸太の上端で柱のホゾを造り、ケタ材の穴にホゾ差しとなる。ケタの上に長材の梁を二メートル間隔で渡し、さらに梁の上に長木丸太（細丸太）を並べて、上に乾草を敷き詰め、さらに土を三十センチほどの厚さにのせるのである。

この後は入り口を切り抜き、枠付けをして厚板

造りの扉と、明かり取りの窓も同様にして造り、一応建物は完成。実に原始的建物で、鋸と斧、それに溝掘りの手斧、使用に耐えられない穴掘り用ののみと、数少ない工具による建築作業であった。

内部は、三方にコの字形の柵が三段造られたが、高さがないので、座ると頭がつかえる。おまけに、丸太造りの柵であるから、寝ると丸太のデコボコで体が痛めつけられる有様。

夜の明かり取りは松根しょうこんや白樺の皮等を燃やし、暖房は土間通路に二台の薪ストーブであった。そして、この建物一つに千人もの人数が収容された。

収容舎屋が完成して初めての晩、真夜中に大事故が発生した。柵の丸太材はすべて生木で、芯までの凍木であった。暖房と大勢の体温によつてそれが徐々に解凍し、初め丸太材は水を張つたようにぬれていたが、凍木が解けるに従い人の荷重で横材がたわみ、取り付けの仕口の掛が外れて、二

段目の柵の一部が人間もろとも落下し、一段目に寝ていた人たちが下敷きになつたのである。悲鳴とともに暗闇の中での大騒ぎで、救出に当たつたものの、既に三人が絶命していた。

地獄に生きる

来る日も来る日も重苦しい鉛色の空から粉雪が舞う。凍てつく寒さである。手足が麻痺して、睫毛が凍りつき、鼻毛も凍結、エカエカして息が詰まる思い。全身から知覚が消える。経験したこともない酷寒である。

ここシベリアの地で、飢餓と酷使と屈辱に身も心も使い果たし、生きる望みを失つた極限に立つ同胞たちは泣くに涙なく、荒む姿のむごたらしさ。過ぎしあの戦場での弾雨の中を駆け回つた頑健壮快なる若者の姿はどこへ消えたのか。既に知力・気力が消え失せて、痴呆老人の如くみずからの体を支えることさえ至難な姿である。

過酷な労働の日々の明け暮れに、変わることの

ない赤鬼青鬼の罵声が牛馬の如く追い立てる。幽霊さながら、よろめく姿での伐採作業は、見るもまれなる大木に挑む気力もあらばこそ、巨象の足もとに蟻がうごめく如くで、完全凍結の立木は鋸を受け付けず、空腹の体には力の出るところがない。所持する衣類はすべて着重ねるが、体の動きが悪いので寒さが倍加する。骨まで凍る極寒である。誰一人として口をきく者もなく、吹雪のシベリアは暮れるとも作業は全くはかどらない。警戒兵は怒声とともに鞭を振って雪明かりの山中を駆けずり回ってせき立てる。「ノルマ遂行まで」と夜半までも酷使を続ける。

帰りの夜道、路傍に次々と倒れる戦友を互いの肩に小屋までたどり着くが、翌朝まで続かぬ命であった。

また、空腹によるめく体で丸太を抱え込み、担いで運ぶ貨車積み作業も過酷な労働であった。当初は特に要領を得ないので無駄骨を折るばかり。丸太に負けて腰が砕けてひざまずき、怪我をする

者も多く出た。細丸太を担ぎ始めば容積はかどらず、また、本丸太だけが土場に残ることになる。最大の難題は積み込み時間の制限で、二時間ないし三時間で終了しなくてはならない。ソ連兵は略奪した時計を見ながらせき立てる。死ぬ思いで積み出して行っただと思う間に、また次の車両が入ってくる。昼夜の別なく、不定期極まる貨車運行である。ノルマも何もない夜中の強制労働。防寒着に霜が凍りつき、担ぐ丸太が足に滑り落ちる。貨車に投げ込む丸太の音は、暗い闇の中の地獄の音を響かせる。

積み終えた列車をうらめし気に見据えて獄舎に帰り、空腹を抑えて就寝するが、右も左も隣の方はそれが最後、呼べど答えず息絶えた。

怨念深き友の死に顔を拝み、明日は我が身かと悲嘆にくれる連日である。誰に伝言するともなく精根尽きて、若き命を空しくシベリアの凍土に果たた多くの戦友たち。その一人一人の形相は、まともに見据えることさえ憚られるまでに凄惨その

ものであり、瞬時にして脳裏に焼きつく強烈さであった。ご冥福を祈るのみ。

死の伐採作業

冬期間のシベリアの天候は、毎日が鉛色の空から粉雪が降るとも飛んでくるとも知れぬ日々であった。地下、地上、総ての万物が凍てつく。黎明には零下四、五〇度にも気温が下がる。

朝は五時半起床で、凍りかけている一かけらの黒パンを与えられた後、牛馬の如く小屋を追い出され、ひととき、例の人員点呼を受けてから伐採現場へと出発する。

道なき原始の森林の中には、他に動く生物は全くいない。その昼も薄暗い森の中の静寂を無言で動く集団がしばし移動する。

静けさを破って、先頭の警戒兵が甲高くわめく。「急いで歩け！」ということであろう。暫くすると、自動小銃が上空に向けて二、三発発射される。かつては銃口を向け合って敵愾心を燃やし

た仲、今の相手は勝者であり、当方は敗者、服従の身である。鉛色の空とともに、いつ晴れるというあてもない悲嘆の歩みは重かった。

三、四キロメートルも歩いて伐採現場に着く。

緩い斜面一帯巨木の林立で、五〇センチから八〇センチ以上もある赤松の原始林である。ソ連兵は雪と落葉をかきのけて、マツチ箱を地面に立てて五センチの高さを示し、この高さから切り倒して、長さ二メートルに切断せよ、と指示し、二人一組に鋸、斧各一丁ずつを与えて作業開始となる。

多くは全くの素人である。巨木の根元は地面に大きく張り出しているから、五センチどころか三〇センチ上げたとしても太さはかなり違う。誰もが手を出そうとしない。

ソ連兵は怒鳴り立てる。言葉の通わない押し問答の挙句、彼は斧を手にして根株を切り削りして見せたものの容易でないと分かって断念し、一〇センチくらいまでは良いと言う。それみると言わ

んばかりに彼を見つめると苦笑する。これで彼らは、できもせぬ無理難題を我々に押しつけることをやめた。

体を動かさずにいると骨まで凍る思いがする。

一〇センチと言うなら一五センチでもと鋸を引き込む。一メートルの鋸を向き合つて引き合うのになかなか呼吸が合わない。それに、凍木で鋸が切り込めない。その上、鋸にしる斧にしる、ヤスリも砥石も当てたこともない赤サビだらけの刃物である。即座に要領が得られないのも当然で、凍土の上に腰は据えるが手の方は動かない。

ソ連兵はあちこちで「根株を下げろ」とか何とか怒鳴り散らしている。止むなくやる気にはなるが、腹に力がなく一向に鋸は進まない。何事も同じであるが、要領と能率のばらつきはすぐ現われる。昼前に二本倒す者、まだ一本目を半分までも鋸が入らない者、様々である。

昼食時、焚き火をして飯盒を温めるのに、ソ連兵が雪をけつて踏み倒す悪事を働く。こんなとき

は粥が凍り、アイスクリーム状のものを冷え込んだ体に入れる始末であった。

執念を燃やした末、倒れる巨木の様は見事である。完全に樹木が凍っているから、砲弾の炸裂音とも思われる轟音とともに二、三〇センチもの幹の末端や枝が雪煙とともにこつぱみじんに飛散する。このとき、退避が遅れて飛散した木片が当たつての怪我、または身の動きが悪く、倒した丸太の下敷きになつての死亡者は、当初はしばしばあった。

作業は、倒した丸太を二メートルごとに切断し、一定の場所へ一・五メートルの高さに積んで、ソ連の係の検定がある。次の作業は、枝葉を集積しての焼却と後片づけ、切り株部分の皮を斧で削り取るのである。これは、残骸を放置すれば、腐る時点で松食い虫など害虫の繁殖するものとなるので、森林が荒らされないように防止するためと聞かされた。ソ連の愛林精神の徹底ぶりは、驚きとともに感銘も受けた。

伐採作業は休みなく続く。どんなに天候が荒れようが、気温が下がろうが、容赦なく作業へと駆り立てる。我々の方も、一つ一つ要領を得ながら互いに作業方法の向上修得によって、徐々にコツが身についていくが、その反面、耐えがたい極寒の中での飢餓と疲労困憊による犠牲者も多くなつたのである。

しかし、ソ連側は次々に作業のノルマを引き上げてくる。そのノルマを達成するまでと、夜中の一時までも山で作業をさせるのである。収容所へ帰る夜道に力尽きて倒れる者が続出する。実に残酷悲惨な地獄に勝る難業酷使の中で、誰一人として援助の手を差し伸べることはかなわず、望郷の念も尽き果て、凍土の露と化した戦友が八百人を超えた。これは、昭和二十年の末月から翌年四月まで約四カ月間の犠牲者で、多くは春を待たず、一月、二月に事切れたのであった。最高一日六十数人の凍結した遺体をそりで山の吹きだまりに運んだのである。運んで、ただ棄ててきたのであ

る。合掌。

【執筆者の紹介】

出生 大正十一年十月、岩手県大船渡市日頃市

町字田代屋敷

学歴 昭和十二年三月、日頃市尋常高等小学校

高等科卒業

職歴 昭和十二年四月、建築大工徒弟修業

同 十五年、釜石製鉄社宅建築

軍歴 昭和十八年二月、現役で関東軍百七師団

第九十連隊（満州第百八十一部隊）第九

中隊に入営

同 十九年十月、陸軍兵器学校入学

同 二十年四月、原隊復帰。陸軍伍長。

九十連隊本部隊

同 二十年八月九日、満州西部国境で日

ソ戦闘に参戦

同 二十年八月二十九日、武装解除

シベリア抑留 昭和二十年十一月三日、シベリ

ア・ジップヘーゲン収容所に収容

され強制労働に従事

同 二十三年六月、ナホトカ労働

大隊

同 二十三年七月、ナホトカ出

港、帰国

帰国後の職歴

昭和二十三年七月、建設業自営。

その後、大船渡職業訓練協会会長。

岩手県技能士会大船渡地区技能士

会長

現住所 岩手県大船渡市大船渡町字明神前

昭和二十年八月九日の旧満州西部国境において

歩兵九十連隊とソ連軍との参戦者、満州九十連隊

アルシャン会戦友会幹部として、特に九十連隊長

以下、部隊主力の収容所ジップヘーゲン収容の

ジップヘーゲン副会長として現在活動している。

なお、盛岡市において毎年十月開催されている

シベリア抑留岩手県関係死者慰霊祭に、戦友、

遺族の参加のため尽力している。

(岩手県 田辺 壮久)

終戦とシベリア抑留記

栃木県 天野 喜一

現役入隊と軍隊生活

敗色日々に濃くなる昭和十九(一九四四)年十

一月二十日、青春二十歳の現役兵の一員として徴

集となった。軍都宇都宮東部三十六部隊に入隊

し、直ちに軍服の支給を受けた。襟に一つ星の陸

軍二等兵に着替え、格好は兵隊となった。私物を

まとめ見送りに来た家族に引き渡し、最後の面会

となった。

その後、営内において嚴重な身体検査と予防注

射が行われ、一週間後の十一月二十六日、私達千

人の出征部隊が威風堂々、歩調をとって衛門を出

て行進を始めると、見送りの親兄弟は一緒に歩き

出し、我が子を真剣な眼で探す姿が見受けられ、